

つくる 繕いの風景から

「直るマン」登場

割れた食器を直すヒーロー「直るマン」が、児童のアイデアで生まれました。破損食器を繕って使用するプロジェクト（本誌2016年10月号参照）が広がる中、東京都の江戸川区立篠崎第五小学校での出来事です。給食主任の高野賀代先生と学校栄養職員の石黒理恵先生の指導により歌・振り付けが盛り込まれ、劇として演じられました。そのストーリーは…。

乱暴に片付けられ食器が壊れますが、どうせ直るからと気に留めない児童たち。そんな児童に失望し力を失う「直るマン」。しかし割れた食器に悲しむ児童を見ます。児童たちの、再び食器を大切にする気持ちを受けて「直るマン」は復活し、また食器は大切に扱われ始めます。

この話の中で素晴らしいのは、ただ繕えば良いわけでなく、そもそも原因となる破損を減らし大切にすることの重要さが、ス

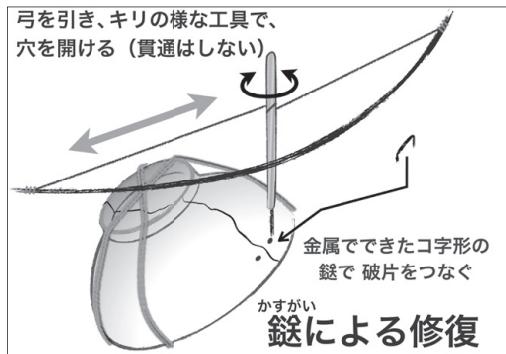


▲みんなの大切な思いを受け、復活した「直るマン」

トーリーの軸として語られている点です。これは一見、当たり前のようにですが、実はわれわれにとって非常に身近で深刻な課題です。例えば「リサイクルされているから消費して良い」「省エネ製品だから、どんどん買い替えても問題ない」「省エネだから、どんどん使っても大丈夫」など…。しばしば環境問題においては「免罪符」と表現されますが、特に環境対策技術の進んだ日本においては、このような意識の傾向が強いといわれます。ですから、「直るマン」

▶子どもが大切にする気持ちを忘れてしまったことで、力を失った「直るマン」。手をつなぎ、みんなの大切な思いを新たに受ける（江戸川区立篠崎第五小学校）





のような形で、繕うことの本質を考えてもらえるのは、うれしく感じます。

鎌 (かすがい)

チャン・ツイイー（章子怡）が映画初出演で主演を演じた『初恋のきた道』（ベルリン国際映画祭受賞、1999）という中国映画、見ると個人的にですが、かなり驚きのシーンがありました。鎌という修復技術がありますが、その作業の様子が描かれていたのです！ おそらく国内では失われた技術、映像で見られるとは… !!

そもそも鎌は、材木同士をコ字形のくさびでつなぐ技術ですが、「子はかすがい」ということわざがあるように、つながりの

かなめ要をも象徴します。映画では、初恋相手で遠方にいる先生が使っていた茶碗が割れてしまいます。悲しむ主人公のために、親が職人に依頼しました。なぜ直すのか？ 思い入れがある物だからです。さらには物の裏側で、思いそのものが鎌でつながれ繕われることを願うからでしょう。

かつて、ある上司から「自分の子どもたちに、将来も幸せに生きてほしい。だから企業でできる環境対策を進めてほしい」と指示を受けました。繕いや環境活動を、行為や義務としてではなく、どのような存在のために行うのか、何度も振り返り考えることも教材につながる気がします。

※『いただきます.info』食育の情報発信開始！
<http://itadakimasu.info>



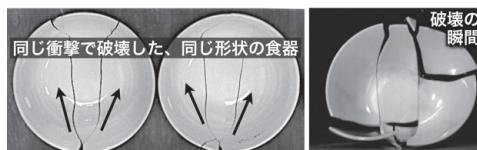
▲鎌で修復された磁器

知りたい！ うつわと食のミニ知識

うつわの割れ、あれこれ②

陶磁器の多くの破損は、割れた破片から原因がわかります。縁に物が当たると欠けるか割れるかしますが、それぞれ違う原理で生じます。

縁に物が当たり割れる場合には、縁の内側から放射状に割れが進行します。右図のよう



に、どの場所から、ヒビが生じたかで破損原因を絞り込みます。

